

令和7年度 第1回岡崎市ユニバーサル農業推進懇談会 会議録

1 会議の日時及び場所

令和7年6月26日（月）14時～16時

岡崎市役所西庁舎5階503号室

2 出席者（敬称略）

（構成員）

加藤 智子：関係団体（あいち三河農業協同組合女性部長）

小林 和寿：関係団体（あいち三河農業協同組合営農企画課長）

藪本 真也：関係団体（多機能事業所てんじん）

柴田 若江：農業実践者（岡崎市農業委員）

杉山 琢士：市民公募

隅田 裕二：関係団体（愛知県立みあい特別支援学校教諭）

（テーマ関係者）

石塚 玲子：関係団体（特定非営利活動法人アルクス理事長）

山本 和弘：関係団体（あいち三河農業協同組合産直指導課長）

農務課：小林 哲夫、井尻 智久、西村 燿

中山間政策課：小早川 侑

障がい福祉課：高桑 未紗樹

ふくし相談課：柴田 千奈美

岡崎市社会福祉協議会：山本 深雪、前田 有貴子

3 会議次第

- (1) 岡崎市ユニバーサル事業について
- (2) 農福連携アンケートの結果について
- (3) 検討事項について

4 会議要旨

- (1) 岡崎市ユニバーサル事業について
市民農園開園状況、農福連携実績等について、事務局から説明。
- (2) 農福連携アンケートの結果について
農業者向けアンケートと福祉事業所向けアンケートの結果について事務局から説明
- (3) 検討事項について
ア 農業者からの食材提供に関する福祉事業所等への情報提供の方法について

○小林氏

出荷時期後のいちごの収穫と提供は今年度農福連携として実施できたが、来年度はJ A所管のハウスが岡崎市にないため厳しい。再来年実施できるよう検討する。

○事務局

いちご以外にもなすや部会に声をかけることはでないか？

○小林氏

なすも規格外のもので捨ててしまう部分が多くあるので、やり方は検討する。

○石塚氏

なすもジャムやアップルパイのような加工ができるのでいただけるとありがたい。ただし、量は多すぎると困る。

○藪本氏

障がい者が規格外の野菜をカットしようとする手順が分からずパニックになることがある。障がい者向けの生活施設の給食で使うことは可能かもしれない。

○柴田氏

農家は捨てる野菜が結構あるが、子ども食堂との関わりがなく捨ててしまっている。

○社会福祉協議会

社会福祉協議会では農家さんから野菜提供の連絡があれば子ども食堂とのマッチングを行っているので、農家さんから連絡してほしい。

○加藤氏

ふれあいドームでは2つの子ども食堂へ食材提供しているが、ひと月に1回程度なので、農家としては日にちを把握していないため、いつでも規格外を提供できるようにコンスタントに実施してほしい。

○社会福祉協議会

現在 42 か所子ども食堂があり、全体としてはほぼ毎日どこかの子ども食堂が開催している。

○加藤氏

社会福祉協議会が規格外野菜を農家のところまで取りにいけないのか？

○前田

基本的には農家さんに規格外野菜を届けてもらいたい。

○加藤氏

昨年度、J Aあいち三河女性部の取組でローゼルを栽培し、福祉事業所にジャムにしてもらったが、今年度は知り合いがローゼルの育ててくれなかったため、一人で栽培しており継続が難しいと感じている。

○ふくし相談課

岡崎市は居場所づくりを広めており、高齢者や障がいのある方は地域に貢献し、人との交流を楽しみにしている方が多いため、農業者の方が野菜の育て方を教えてくれれば、作業をしたい人はたくさんいる。

○加藤氏

ローゼルで農福連携を継続していきたい。

○柴田氏

山間地の耕作放棄地で地元の高齢者がローゼルの栽培できるといいのではないかと。

○事務局

農家さんへの規格外野菜がないかの周知はどうするか。

○小林氏

農家さんへアンケートを実施して農福連携に興味のある農業者を見つきたい。部会員向けのチラシも昨年度作成したのでそれを使って周知します。

○事務局

規格外野菜を取りに行ける福祉事業所への周知はどうできるか

○石塚氏

一般的には福祉事業所は人手不足と人件費不足でギリギリの人数で運営しているので、規格外野菜を受取りたい事業所は少ないと思う。

○障がい福祉課

周知の方法では福祉事業所に一斉配信できるメールがあるのでそれを活用できる。

○ふくし相談課

福祉は手帳をもっている方だけではなく、手帳をもらえず困っている人は多くいる。そのような方は歩いて行ける場所で作業がもらえると嬉しい。

○加藤氏

地域で農福連携を実施するリーダーがいるといい。一般の方は生活困窮者に出会う機会がない。本当に困っている方に規格外野菜を渡せないのか。障がい者だけでなく生活保護になれない方に手を伸ばせられないか。

イ 農福連携に取り組む農業者及び福祉事業所等の募集方法について、事務局から説明

○事務局

お試しノウフクに取り組む農業者が少ない。

○柴田氏

駒立のぶどう園でも農福連携に取り組んでいる農家は数件しかおらず、なぜ広まらないのか。農業者が福祉事業所に払う賃金の交渉がうまくいかずやめてしまうこともあった。

○ふくし相談課

福祉事業所を受入れるとやり方の説明などで農業者にとって負担なのではないか。

○柴田氏

福祉事業所は一回やり方を教えれば、あとは勝手に作業してくれるため、助かっている。このことを農業者にもっと周知する場が必要。

○石塚氏

多くの福祉事業所が農福連携のハードルが高いと思っている。愛知県が実施している農福連携の講習会に福祉事業所の職員に行ってもらい、農福連携へ興味をもってもらうことが大切で、農福連携支援技術者になる講習に参加するのも一つの方法だと思う。

○事務局

産直で農福連携のPRは可能か。

○山本氏

ポスターやメール配信はできるが、産直は小規模農家が出すところのため、人を雇うようなことは難しい。大規模農家に農福連携を声かけできるとよい。

○ふくし相談課

生活保護のような方はふくし相談課でトレーニングを2年してやっと外に出られるようにしているのでそのような方も農福連携で農業者が受け入れてくれないか検討してほしい。

ウ 福祉事業所が製造する岡崎市PR土産の商品開発について事務局から説明

○石塚氏

お土産になるものは3か月日持ちすることが条件で、今作っているクッキーは無添加で1か月しかもたないため研究中。クッキー以外でよければドライフルーツティーを作っており、ドライであればかなり日持ちする。

○柴田氏

福祉事業所が加工しなくても既存の加工業者に作ってもらい、企画やパッケージのデザイン、袋詰めなどで福祉事業が絡めば、農福連携の商品ができるのではないかな。

○石塚氏

干し芋で農福連携をしていて、農家さんの育てたサツマイモを2つの福祉事業所が加工と袋詰めを役割分担して製造している。

○柴田氏

イチゴ農家がデカほっぺの加工品を作っているのだから、福祉事業所も絡んで農福連携商品にできたらよいのではないかな。

○事務局

石塚氏の福祉事業所がクッキーづくりに既に挑戦しているため、その完成を期待する。

その他

○杉山氏

農家さんは人手が足りないため、お試しノウフクのお金のサポートだけではなく、人的サポートをすることで、農福連携が活用しやすくなると思う。

農福連携商品を作ることに关しては、福祉事業所が作るのは福祉事業所への負担が大きすぎないか。農商工連携のように農福商工連携ができないか。

額田地区でクラインガルテンを目指したらいいのでは。クラインガルテンとは小さな庭という意味で建物と農地がセットのもので移住政策や観光、市民の憩いの場になればよい。

○中山間政策課

農泊の施設が中山間地域にいくつかあり、農業体験をしてもらっている。

終了を宣言。